

平成12年度厚生科学研究

(生活安全総合研究事業)

## 研 究 報 告 書

研 究 課 題

熱媒体の人体影響とその治療法等に関する研究

平成13年3月

主任研究者 福岡県

## 熱媒体の人体影響とその治療法等に関する研究

主任研究者 福岡県

**研究要旨** 昭和43年のカネミ油症事件発生から33年を経過した現在、患者の高齢化に伴い、患者の症状は複雑化してきている。本県では事件当初から油症一斉検診業務を実施しており、患者の健康状態の推移や油症検診結果のデータの蓄積を行い、有効な治療方法の開発に寄与してきた。本年度も、油症一斉検診を実施し、患者の健康状態を把握するとともに、当研究初年度にあたる平成10年度から12年度の検診結果を基に、近時の本県における患者の症状等を解析した。

### A. 研究の目的

昭和43年に発生したカネミライスオイルによる中毒患者（以下「患者」という。）が、今なお完全に治癒していない状況に鑑み、患者の検診及び追跡調査を実施し、油症の有効な治療法の解明を図ることを目的とする。

### B. 研究方法

これまでと同様に九州大学医学部、福岡大学医学部、産業医科大学医学部、荒尾中央病院の医師を中心として検診班を組織し、北九州（夜間休日急患センター1日）、福岡（中央保健所2日）、久留米（久留米保健所1日）の3地区において、県内の患者を対象に一斉検診を実施し、その検診結果に基づき健康管理指導を行った。

また、今年度は患者の症状等を把握するため、当研究の初年度にあたる平成10年度から12年度にかかる検診データの解析を行った。

### C. 研究結果

受診を希望する油症患者76名を対象に、一斉検診（診療科目：内科、皮膚科、眼科、歯科）を実施し、その検診結果に基づき、72名の患者に対して健康管理指導を行った。

#### ①内科

診察所見及び血液生化学検査等の検査所見から健康管理上の注意点について情報提供を行った。

血液生化学検査では、62名（83％）に高脂血症や血小板減少等が認められた。

腹部超音波検査では、50名（67％）に胆石や腎結石等の疾患又はその兆候が認められた。

胸部X線写真検査では、21名（28％）に心拡大等の異常が認められたが、軽度のものであった。

心電図検査では、11名（15％）に左室肥大や虚血性変化等の異常が認められたが、軽度のものであった。

その他、13名(18%)に高血圧が、3名(4%)に血尿が認められ、血沈検査では異常が認められなかった。(図1)

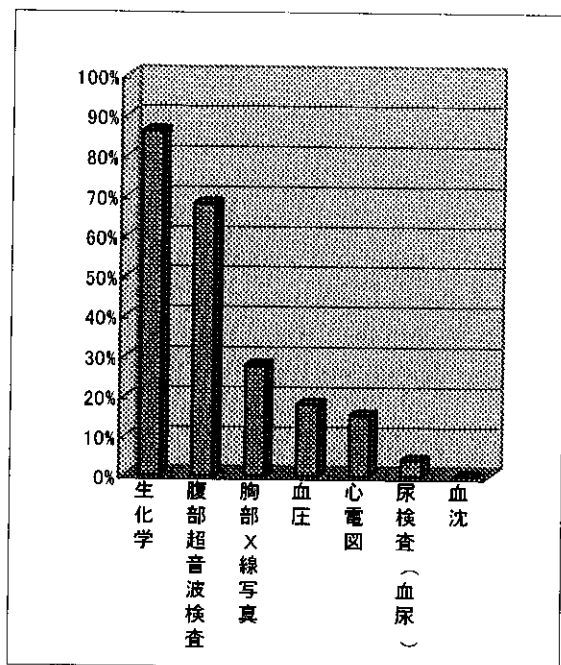


図1 内科所見

診察所見、検査所見とも特に異常が認められなかったのは3名であり、ほとんどの患者が何らかの異常を抱えていることがわかった。

しかし、油症特有の症状以外についての指摘も多く、事件後30年余りが経過し患者の高齢化が進む中、患者の症状は複雑化していると思われる。

## ②皮膚科

診察所見に基づき、健康管理上の注意点について情報提供を行った。

面皰・痤瘡様皮疹については、16名(22%)の顔面や背中などに認められた。また、そのうち4名は瘢痕も認められ、かゆみを訴える者も少なかった。

耳や陰股部に嚢腫が認められた者は12名(17%)で、切開等の治療が必要である者もいた。

色素沈着については、7名(10%)の手足の爪に認められた。

その他、4名(6%)に爪白癬が認められた。(図2)

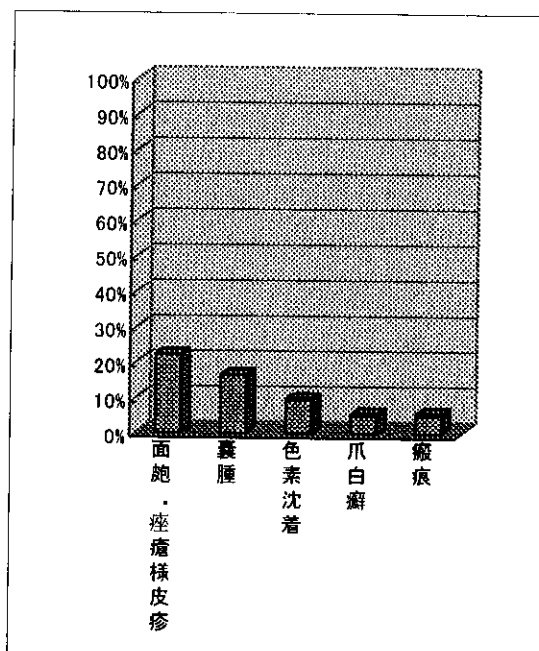


図2 皮膚科所見

皮膚症状については、症状の回復が見られる者もあり、19名(26%)は特に異常は認められなかった。

このように、発生当時の急性症状を呈する患者はほとんどいなくなった。しかし、多くが自覚症状を訴えており、また医療機関を受診している者も多いことから、患者の健康状態は決して良くはないといえる。

また、本年度は平成10年度から12年度にかけて検診を受診した患者のうち、血液検査データの得られた211名のPCB

濃度及び性状について解析した。

表1 過去3カ年におけるPCB濃度

PCB濃度(ppb)	H10	H11	H12
0以上1.0未満	5	2	2
1.0以上2.0未満	21	16	14
2.0以上3.0未満	18	16	20
3.0以上4.0未満	8	15	16
4.0以上5.0未満	5	14	14
5.0以上6.0未満	4	2	6
6.0以上7.0未満	0	4	2
7.0以上8.0未満	1	1	0
8.0以上9.0未満	0	1	0
9.0以上10.0未満	0	0	0
10.0以上	1	1	2
合計	63	72	76

表2 過去3カ年におけるPCB性状

パターン	H10	H11	H12
A	28	25	31
B	18	11	12
BC	0	4	2
C	17	32	31
合計	63	72	76

表1に示すとおり、PCB濃度については、1.0ppb～2.0ppb及び2.0ppb～3.0ppbが最も多く、近年3年間では顕著な変化はみられなかった。

また表2に示すとおり、PCB性状については、Aパターン及びCパターンが最も多く、濃度同様3年間での顕著な変化はみられなかった。

しかし、年度毎に受診者は異なるため、3年とも受診した患者41名について、経年的な変化を確認したところ、PCB濃度及び性状ともに目立った変化がある患者は少なく、高齢化の影響を考慮しながら、今後とも推移を見守っていく必要がある。

#### D. 結論

事件発生から33年を経過した今もなお、様々な症状を呈し、また体内に蓄積されたPCBが存在する。体内に蓄積したPCB等が身体にどのような影響を与えどのような病気をもたらすか、油症治療研究のさらなる推進が期待されるところである。そのためにも、その基礎となるデータの蓄積は重要であり、今後とも検診を継続していく必要があると思われる。